

貯蔵タマネギの腐敗とネギアザミウマの関係

タマネギ栽培において、ほ場でのネギアザミウマ防除を行うことで、貯蔵中の腐敗が少なくなることが明らかとなりました。

1. ネギアザミウマによる被害

ネギアザミウマによるタマネギの被害は、生育中に茎葉から吸汁しカスリ状の白斑が生じる直接的な食害(写真1)と、タマネギえそ条斑病の原因となるアイリスイエロースポットウイルス(IYSV)を媒介する間接的な媒介害が知られています。

2. 県内タマネギ栽培におけるネギアザミウマ防除

ネギアザミウマによる食害は、草丈の矮化、球の小型化を招きますが、本県のタマネギ栽培はネギアザミウマが増殖する前の5~6月に収穫するため大きな減収要因とはならず、またタマネギえそ条斑病は本県未発生のため、タマネギ栽培では本虫を対象とした防除は重視されていませんでした。

3. タマネギ腐敗とネギアザミウマの関係

これまで、収穫後のタマネギにおいて、貯蔵中に腐敗が生じ、廃棄処分になることが長年の課題でした。近年、ネギアザミウマはタマネギ腐敗病などの発生にも関係があることが明らかとなり、タマネギの立毛期にネギアザミウマ防除を行ったところ、貯蔵中の腐敗が少なくなる傾向が認められました(表1)。このことから、栽培暦にネギアザミウマ防除を組み入れ、腐敗発生率の低下に取り組んでいます。



写真1 食害痕

表1 タマネギほ場のネギアザミウマ個体数と収穫後腐敗球数の関係

調査年次	ほ場	ネギアザミウマ個体数 ^{※1}		腐敗球率(%) ^{※2}
		葉上	粘着トラップ	
2020	A	約1000頭	約2500頭	70.9
	B	200頭未満	約500頭	23.5
	C	200頭未満	200頭未満	20.0
2021	A	殺虫剤散布(未調査)		10.0
	D	約500頭	約400頭	68.8
	E	約400頭	約300頭	38.5

※1 ピーク時の数 葉上は見とり調査、

トラップはホリバー®ブルー(アリストライフサイエンス)を用いた

※2 収穫後60日目の調査

問い合わせ先：資源環境研究部病虫科(担当：福間貴寿・西山雄大)

TEL 0853-23-7188

E-mail: nougi@pref.shimane.lg.jp